

第641号



喬木村公民館：長野県下伊那郡喬木村6664



発行日 2022年8月17日
 発行責任者 喬木村公民館 長 徹
 市 瀬 公民館 編集部長
 編集責任者 仲田 久志
 印刷 龍共印刷株式会社

【あらすじ】「その一」
 「わたし」の家では、ニワトリのピビ、ネコのペル、熊野犬のマヤを飼っていた。三匹は、大変仲がよかったが、ときには、けんかもした。しかし、この三匹のけんかは、人間の争いより美しい、どこかに、思

「マヤの一生」
 昭和四十五年
 菅沼利光

『棕鳩十全集』掲載作品
 菅沼利光

棕鳩十ものがたり 77

ある日のこと、顔に大きな傷あとのある野良犬に追われたネコのペルが、いちもくさんに家の庭に駆け込んだ。ペルは、庭の木の木の下の横になっていたマヤに助けを求めたのだ。マヤは、野良犬に向き合い、がちつとかみ合ったが、けんかに慣れた野良犬にかなうはずもない。マヤは、野

いやりがあるような争いだった。
 ある日のこと、顔に大きな傷あとのある野良犬に追われたネコのペルが、いちもくさんに家の庭に駆け込んだ。ペルは、庭の木の木の下の横になっていたマヤに助けを求めたのだ。マヤは、野良犬に向き合い、がちつとかみ合ったが、けんかに慣れた野良犬にかなうはずもない。マヤは、野

良犬に組み伏せられ、肩や顔の辺りにかみつかれ、血を流していた。
 マヤのピンチを助けたのは、ペルだった。じつと様子をみていたペルが、野良犬の背中に飛び乗り、鋭い爪で、野良犬の目の辺りをひっかいたのだ。ペルの攻撃で、野良犬がひるんだそのとき、マヤは、犬の急所である足の裏に思いっきりかみついた。野良犬は、びっこを引きながら、逃げていくのだった。

マヤは、熊野の狩人たちが狩りに使った熊野犬だ。生まれてまもなく、熊野から「わたくし」の家に送られてきた。「わたくし」の



家の三人の子どもの中で、マヤが一番なついていたのは、最初にふところに入れて抱いて寝てくれた、次男だった。
 次男が、幼稚園の二年組のときのこと。次男は、か

けつこで、半分も走らないうちに、びりになった。すると、マヤは、ワンワン鳴きながら、運動場に飛び出し、首ひもをつけたまま次男に飛びついた。次男は、ひもを持ってマヤと一緒に

「わたし」の家では、サツマイモやカボチャをつくって、実はもちろんだが、その茎を食べていた。また、川魚を釣って、乾燥させたものを粉にして、食べてもいた。
 戦争が烈しくなるにつれて、食べるものだけでなく、着るものも無くなっていった。政府は、「欲しがりません、勝つまでは」という

走り出し、三等で走り抜いた。
 昭和六年に満州事変が起こり、戦争は少しずつ広がっていった。昭和十八年になると、こんな農村でも、食べるものが、本当に不足してきた。

「わたし」の家では、サツマイモやカボチャをつくって、実はもちろんだが、その茎を食べていた。また、川魚を釣って、乾燥させたものを粉にして、食べてもいた。
 戦争が烈しくなるにつれて、食べるものだけでなく、着るものも無くなっていった。政府は、「欲しがりません、勝つまでは」という

標語を作り、物がなくても我慢するのが立派な日本人だと宣伝するのだった。
 町のえらい人たちは、町の人々を集めては、「配給以外にお金を積んで、物を手に入れてはいけません。みんな一様に貧しさに耐えることが、戦地で戦っている軍人に報いることだ。これができる者は、非国民だ。」と演説するのだった。
 ある日の夕方、「割りあて以外のものを、横流しで、手に入れるな。」と何度も演説した、年取った陸軍将校の屋敷の前を通りかかると、そこからスキヤキの匂いが漂ってきた。(つづく)

コロナで会えなくなつて三年。今年こそは東京で同期会をやらうと計画していると、開催出来たらもう一度当時の思いを聞いてみたいと思つている。(館長)

沖繩が返還されて三年で東京の教員養成大学に進学したY。当時、私は気づかなかったが、Yは地元を待って一身に背負って上京していた。今も交流が続くYと話すとき、サッカーの話で盛り上がる。当時、「教員となつて沖繩に帰り、地元サッカーの振興に貢献したい」と強く思つていたことがよく分かる。

【主催】社会教育委員会
 【共催】学遊館広場・飯田女子短期大学・少年少女消防クラブ
防災探検ツアーへ行こう！
「体験を通じて成長の場を」
 社会教育委員長 座光寺秀元



熊と戦った筒井さんの話を真剣に聞く子ども

社会教育委員会では、子どもたちの豊かな成長のために心に残る体験を提議したいと考え、三年前までは学遊館でお泊り体験を実施してきました。しかし、コロナ禍でお泊り体験を行うことが難しくなり、昨年は国際宇宙ステーションに滞在中の星出さんと交信する体験を行いました。今年子どもたちに異世代交流の場を提供してあげたいと考え、社会教育委員会でも繰り返し検討し、大島地区での地域探検と避難所での食事づくり体験を実施することにしました。参加したのは小学校一年生から六年生まで、十九名の子どもたちです。

第一部の大島地区での地域探検では、「自分たちで考える」ことを目標に活動しました。
 普段関わることのない大島の方や自然、大島の歴史などに触れ、子どもたちは活動を楽しんでくれました。現在、大島地区には小学生がいま

コロナ禍で身内が帰省することも少なくなつてしまったので、「子どもが来るのが楽しみだ」「子どもたちの声が聞こえると活気が出る」と大島の方が笑顔で話してくださり、開催する側にとつてもうれしく思いました。

第二部の避難所での食事づくりでは、飯田女子短大の先生と学生にバッククッキングを教えてもらいました。メニューは味付き缶詰を使った味噌飯と、卵焼き、ホットケーキミックスとヨーグルト・プリン・チョコなどを使った蒸しパンを作りました。子どもたちは大島探検でお腹が空いているのも忘れて、調理を楽しんでいました。バッククッキングは災害時に限られた材料で調理が出来るよう工夫されています。万一災害に遭ってしまった時、



女子短の生徒さんとも交流が出来ました！

今日の体験を活かしてもらえればと思います。
 コロナ禍でどのような活動を企画していけばよいか今後も苦労すると思いますが、子どもたちの成長のために積極的に取り組んでいきたいと思つています。今回の防災・地域探検ツアー実施にあたり、大島地区の皆さん、飯田女子短大の先生と学生の皆さんはじめ多くの皆さんのご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



- 〈参加した子ども、家族からの感想〉
- ・大島探検がとてもしかったので今度は友達と自転車で行ってみたい！
 - ・バッククッキングが簡単で美味しくできてよかったです。夏休みのおやつやご飯のおかずで役立ちそうです。
 - ・同じ様な企画が他の地区でもあれば村のことを学ぶきっかけになりいいことだなと思つました。

あの時

八月は毎年戦争について考える月になっている。今年には沖繩返還五十周年。私が高校一年の春だったように記憶している。
 大学で一緒にサッカーに燃えた友だちに沖繩出身のYがいる。学生寮に入りサッカーを頑張りながら苦学していたYは、毎月、月末に届く仕送りを、首を長くして待っていた。お金が足りなくなると、申し訳なさそうに「仕送りが来たら返すから」と仲間を借金して凌いでいた。サッカーの合間をみてアルバイトもやっていたが、アルバイト収入を加えても生活は苦しく、壊れたサッカーシューズにテーピングテープを巻いて大事に使っていたことを思い出す。時々同期で飲みみに出かける時は「アルバイトがあるから」と断ることが多かった。



下澤 海さん

加々須地区で竹細工を製作、販売する工房を家族で営んでいます。工人船工房です。現代の日常に合っていること、丈夫で使いやすいことを大事に、日々竹籠を製作しています。素材となる竹は、十一月下旬頃に真竹の竹林から一本ずつ切り出し、四ヶ月の釜で煮た後、一ヶ月程天日で乾燥させたものを加工します。そこから編む為の「竹ひご」にする作業の「荒はぎ」や専用の道具を使って竹ひご毎の幅や厚みを揃える「幅取り」や「銚取り」等の加工で均一な竹ひごを作ります。他にも竹ひごを編み上げる作業や、固定するための縁作りなど、三十以上の工程を経て竹籠を製作していきます。時間と手間のか



安養寺の境内に、犬が座っているような形をした、「うなり石」と呼ばれる石がある。むかし、この石が邪魔だというので、村人たちが取り除こうと、石の周りを掘ったが、根を張ったように地中に深く埋まっていた、どうしても動かせな

語り継ぎたい昔話シリーズ 「たかぎの民話と伝説」 『うなり石』 喬木村教育委員会・編

そこで、またの折に動かそうと、掘りかけたままにしておいた。するとその晩から、地の底から響いてくるような低い声で、「ウオーウオー」と悲しそうなうなり声が聞こえてきた。村人たちは、どこか遠くで、犬でもうなっているのだろうと思っていた。ところが一晩ごとに、うなり声がだんだんと大きくなり、「ウオーウオー」と、まるで悲鳴にも似た、悲しそうな声になってきた。女や子どもは夜になると、怖がって外へ出るのを嫌がるようになった。そこで、うなり声の正体を確かめるため、村の中で肝っ玉のすわった、若者が何人か選ばれた。選ばれた若者たちは、村の会所へ集まって、うなり声が出てくる夜中を待った。やがて、人びとが寝静まる頃になると、どこからともなく、「ウオーウオー」という低いうなり声がしてきた。

度胸の座った若者たちだったが、いざとなるとやはり怖かった。しかし、正体を確かめる役目があるので、こわごわ声のする方へたどって行くのだと、安養寺の暗い境内から提灯の明かりをたよりに、真つ暗な境内を、うなり声のする所へと近寄って見ると、その正体は何と、邪魔だといって取り除こうとした石だった。石は体を振りしほるようになり、「ウオーウオー」とうなりながら、いかにも哀れそうな感じだった。そこで若者たちは、あれは石が動かされるのを嫌がって、泣き悲しんでいるのだと、村人たちに報告した。村人たちもこれを聞いて、石を哀れに思い、掘りかけた周りの土を埋めてやった。するとその夜から、うなり声はばったり止まってしまった。それ以来、この石を「うなり石」と呼ぶようになったという。ところが何年かの後に、村の中でえたいの知れない熱病がはやった。するとまた、毎晩のように、うなり声がかえってきた。村人たちは若しや、またあの石がとって、「うなり石」の所へ行くと見ると、その周りに大きな穴があいていた。そこで、さっそくその穴を埋めてやると、その晩からびたりとうなり声が出なくなり、はやっていた悪い病気が治まったという。

喬木俳句会 文月句会詠草

沢蟹と共に濡れゆくランドセル
仙人掌の花に浮かぶや遠き人
久しぶり笑顔が語る夏の夕
万緑や心弾けるピアノの音
岩肌に山百合競う加々須川
杜深く樹々に抱かれ蝉の恋
濃紫の実を結ばんと茄子の花
夏まつり姉のお下がりが懐かしく

松島 みのり

宮島 高枝

村山 たか子

田中 君子

梅雨の蝶そつと葉裏に翅たたみ
夕闇にぼうたんの白浮かびくる
遠き日の学有林の草いきれ
我を抱く浴衣の似合ふ母なりき
卒寿夏音せず来る猫と老い
催涙雨上がりて嬉し恋の星
くにぎかひ何処にもなくて燕の子
少年の眼まっすぐ翡翠に
ほたる狩り欠かせぬ母の草帯
ウクライナ泣き叫ぶ子よ蛙の夜

原 美恵子

西元 くにこ

市橋 ヨリ

松葉 孝子

吉川 てる子



使えるものを必要な人へ。言葉で表すと簡単ですが、実際に行うには多くの人の協力が要ります。SDGsへの取り組みを通じて、物だけでなく人も広く繋がっていきけるよう努めていきたいと思えます。

役場SDGs推進プロジェクト環境班では、どう
知って始める (SDGs) (再利用)
ふれあい広場リユースイベント
喬木村役場 協働・共創によるSDGs推進プロジェクト環境班

分野のSDGsに取り組んでもらえるか、定期的に班会を開いては知恵を絞っています。今回は「ゴミの削減」を目標に、学遊館リユースデーでは対象となっていない幼児・中学生向けのリユースイベントを社協ふれあい広場で実施しました。初めての試みであり、品物が集まるか、人は来てくれるのかと不安も多量中ではありましたが、参加された方から「ありがたい」「うれしい」「またやって欲しい」等の声をいただき、SDGs目標達成に向けて一歩前進出来たように感じま



リユースデーの様子

梅雨明け宣言した途端雨が降り続き、ここでやっと夏らしい暑さが戻ってきた。それと同時にコロナの第七波。それに加えて「サル痘」の国内初確認。やっとな制限なしの楽しい夏休みがやって来ると思っていたのに。阿島祇園祭も早々に中止。三才の孫が初めての浴衣を着て出掛ける練習をしたから可哀想なことだ。秋には東山動物園にも行けるかな。
(編集部)

お知らせ 編集後記

公民館平和学習会実行委員会主催講演会
「世界はスプリットスクリーン～ウクライナが変える世界秩序～ (仮)」
日時：令和4年10月16日(日) 午前10:00～
場所：福祉センター 多目的ホール
講師：市瀬 卓さん (NHKグローバルメディアサービスニュース制作部 担当部長)
講演会の申し込みに合わせて、ロシア・ウクライナ問題に関して知りたいことを、講演会でお話いただきたいことを募集します。皆さん、是非ご参加ください。